

『クロスフェード』

著作 a s h

※この話は『kanon』を元にした二次創作です。
※なお、真琴シナリオについてのネタバレに該当する恐れがあります。

俺はまだ少しだけ肌寒さを感じながら、商店街を足早に歩いていた。

目的の場所まではまだまだ距離があるが、特に疲れは感じていない。そんなものを感じるような気分じゃないってことだろうか。

それにしても、どうして急にあの場所へ行こうなんて思ったのか、自分でもよく分からない。ただ、そうせずにはいられなくなった…それだけだ。

きっかけは天野との何気ない会話だった

「じゃあ、相沢さんなら、何をお願いしますか？」

俺の方を見て、問いかけてきた天野の言葉。

「そうだな…」

俺は空を見上げて、それだけを口にする。

そりゃそうだ。

その時の俺が望んでいたことはたった一つしかないし、それが何なのかは天野も分かってるはずだった。

『クロスフェード』

「そうですね」

空を見上げたままの俺に天野の声が届き、俺たちはしばらくの間、何も言わなかった。

現実なのは、その時俺も天野も同じことを思い、同じことを望んでいたと言うことと、俺たちの願いは——ほんの一瞬の煌めきなんかじゃなくて、ずっとそれだけと真琴と一緒に居られるようになればいい——だったと言うこと。

その日は風が心地いい、実にいい天気だった。

だけど、俺はまだ知らなかった。

その心地いい風が、一つの始まりの合図だったことを。

最初にその兆しを感じ取ったのは、情けないことに俺じゃあなかった。

「お帰りなさい、祐一さん……あら？」

天野と校門で別れてから、のんびりと帰宅した俺が玄関に入ると、なぜかちょうどいいタイミングで秋子さんがいた。そして、いつものように穏やかな言葉の後、かすかに笑ってみせる。

「ただいま秋子さん……って、どうかしたんですか？」

「祐一さん、何かいいことでもありましたか？」

「いいこと？ いえ……これといつて別に……」

確かに特別なことはなかったはずだ……とこれまでを振り返って、ふと天野との会話を思い出した。

「まあ、今日は天気がいいのは確かですけど」

すると秋子さんは手を顔に当てて、またもやいつもの口調で返すばかり。

「そうね、天気がいいのはいいことよね」

「はあ…」

相変わらず秋子さんのマイペースにはついていけない。

だけど俺が生返事をして、秋子さんは気にする様子は見せずに、ずっと向きを変えて笑顔のまま居間の方へと歩いて行ってしまった。

そう言えば、俺の帰ってきた時ちょうど秋子さんが玄関にいるパターンは意外と多かつたりする。もしかしてタイミングを計って待っている…なんてことはあるわけないか。俺はふと浮かんだつまらない考えを振り払うかのごとく、勢いをつけて階段を駆け上がり、自分の部屋へ向かった。

寒い場所に慣れたと言ってしまうえばそうかも知れないが、秋子さんや天野の言葉に乗せられるように、何となく春の到来を感じさせる天気は少しだけ冬服の重みがうつとうしく思えて、俺は少し軽い服に着替えてみた。

「春ももうすぐだな…」

何気なく俺の口から漏れた独り言。

『春がきて…ずっと春だったらいいのに』

ふと浮かんだ真琴の言葉。

そう言や、あいつも寒いのはイヤだって言ってた。もう少し暖かくなればもう変なマコピー語とか使わなくてすむだろうな。

…って、待てよ。あいつのことだから、暖かくなればなつたで「あうーっ…肉まんが売ってないよお…」とか言いそうなものだな…。

『祐一さん、何かいいことでもありましたか？』

次に浮かんだのはついさっきの秋子さんの言葉。

『じゃあ、相沢さんなら、何を願いますか？』

そして続けて、天野の言葉。

一体どうしたっていうんだ？

ふと俺の中に、得体の知れないものがわいてくる。

不安なのか、期待なのか、よく分からない。

だけど、なぜか妙に落ち着かない。

俺はよく分からないまま、自分の中にわいてきたものに突き動かされるように、自分の部屋を出た。

まず向かったのは、いつの間やらびろが我が物顔で専有している部屋。

そこは真琴が以前に使っていた部屋でもある。もちろん、名雪にはすでにばれているのだが、部屋に入ったとたん鼻水やくしゃみが止まらない状態でびろに近づいても、びろの方が逃げてしまうので、「うー…わたし、嫌われてるのかな…」とさすがの猫好きもびろに対しては落ち着きを見せるようになっていた。

ボタンツとドアを開けて、部屋の中を見るとそこには、びろのトイレと、秋子さんが用意してくれた寝床があるだけで、びろの姿は見えなかった。

すぐに俺は一階へ下りて、居間にいる秋子さんに訊ねてみた。

「秋子さん、びろのやつ、どこに行ったか知りませんか？」

「今日はいいい天気だから」

笑顔で答える秋子さん。要するに、天気がよくてそんなに寒くはないから散歩にでも出ると言うことなのだろう。

「ちょっと出掛けてきます」

「はい、いつてらっしゃい」

秋子さんの言葉を背中に、俺は玄関へと急ぎ、その勢いのまま外へと出て行った。

しかし、勇んで外に出たのはいいが、びろの足取りなど俺が知るわけがない。猫の行動範囲はそれほど広くはないと聞いた覚えもあるが、あてもなく探しては、しょうがない。

……って、待てよ。

何で俺はびろの行き先を気にしてるんだろう？……いや、思い返してみれば、それは至って簡単な理由だったはずだ。

びろが春を前にして、水瀬家に戻ってきたこと。

びろは真琴にとっても懐いていたこと。

『じゃあ、相沢さんなら、何をお願いしますか？』

そして、天野の言葉に、俺たちが願ったこと。

奇跡なんて言う、神様か誰かのほんの気まぐれみたいなことを、真剣に俺が信じていたかどうか、なんてことはすでに問題じゃない。だって、真琴が俺たちと一緒にいたこと自体が奇跡であり、それは現実の話でもあるのだ。

「そう、だよな……」

つい俺の口から言葉が漏れた。

そんな自分にとって都合のいい奇跡が続くものなのか。そんなこともどうだっという。

真琴だって、人の温もりが恋しくて、俺と一緒にいたくて、奇跡を自ら招いたんだ…二つの大きな代償を払ってまでも。

望めは確実に手に入ると言うものじゃないのは分かっているけど、強く望まないことには奇跡なんてあり得ない——はずだ。

だから俺は…びろを探してんだ。

自分の都合のいい期待を勝手にして、それを確かめたかった。裏切られることなど考えもせずに。

家を出た俺は、念のため家の周りにびろのやつがないことを確認してから、早足で歩き始めた。その行き先はもちろん一つ、ものみの丘だ。真琴の故郷とも言える場所で、真琴と出会い…別れた場所でもある。

誰もいない…いや、雪だるま一人だけが一緒にいた、俺と真琴の結婚式。

ペールを風にさらわれて泣きじゃくる真琴。

手首につけた鈴の音を子守歌にして、ゆっくりと眠りについた真琴。

そのどれもがまだ記憶に新しく、真琴という存在が消えてしまったことなんて信じられないくらいだ。それだけに、俺はあれ以来ものみの丘には行っていない。天野も自分からは「行きましよう」なんて、言わなかった。

誰もいない丘の風景を見た時、俺は涙をこらえることができるかどうか、自信がなかった。そりゃ、天野のおかげで俺は随分と救われたと思っているし、天野だけじゃなくて、秋子さんや名雪だっいてくれる。それでもやっぱり、真琴が今ここにいないのは現実な

のだ。

しかし、今まで避けてきた場所へと俺は向かっている。絶望やあきらめではなく、希望や期待を抱きながら。

これまでそんな希望を抱いたことはなかったと思う。それは自分の中で、自棄にも似たあきらめがあったからかも知れない。

だけど、真琴が望んでいた季節——春を間近にした今、何でもいからすがするものがあれば一縷の望みを託す……なんてのは、悪いことじゃないと思う。そのきっかけは、天野の言葉であり、秋子さんの言葉だったわけだが。

——こうして俺は少し薄着で、商店街を歩いてるわけだ。出掛けた瞬間は少しだけ寒さを感じたが、そこで引き返すともう二度と真琴には会えなくなるような気がして、そのまま歩き続けている。

そんなことを考えること自体がおかしい、とは自分でも思う。もし、天野がいたら、どんな反応をするだろう？……って、そうか。天野はまじめな表情のまま、おばさんくさい調子で言うに決まってるさ、「わたしも一緒にします」ってな。

まじめにそんなことを言う天野の表情を想像し、何となく俺はおかしさを感じてしまい、自然に口元がゆるんでいた。

商店街を抜けて、俺の足がアスファルトから土の感触を感じるようになってくると、それまでの期待とはまったく違う感情が俺の中に生まれてきた。

——丘に行ったところで、そこには何もないうに決まってる。あるのは少し開けた場所……俺がまだ子狐だったアイツを置いていった場所だけ、さ。

そんな思いとともに、俺の足は徐々に重くなっていった。

この先に、俺が望んだような光景はあるのか？ もしなかったら、俺はどうするんだ？
平気でいられるのか？

ものみの丘をもう少し先にして、突然俺の足が止まる。

冗談じゃないぜ、何をびびってんだ？ もしも何もなかったとしても、それで今の俺の
何が変わるってんだよ？

俺には天野もいるし、秋子さんたちもいる。それに、ぴろだっているんだ。今までそれ
でやってきたんだから、何も変わることはないじゃないか。

——変わることはない、だからこそ俺は望んでいたはずだ。真琴が戻ることを、一瞬の煌
めきなんかじゃなくて、ずっと一緒にいられることを。

それは確かにそうだった。

だから、俺はものみの丘に向かっているんじゃないか。それが叶うかどうかを知るために。
そうだ。

そうなんだよ。

期待とか不安とか、そんなものは確かに俺の中に一杯ある。だからこそ、俺は確かめに
行くんじゃないか。

と、そこでようやく俺の足は再び土を蹴り始めた。

もうしばらく歩けば、ものみの丘が見える。

もう少し……。

もう……。

やがて俺の目の前に、ものみの丘が姿を見せた。
……………

丘の風景を目の前にして、俺が感じたもの。それは「懐かしい」と言う表現がぴったりだった。

「前きた時は二人だったのにな」

帰る時にはまた二人でありたい——そんな言葉を含みながら、俺はゆっくりと丘を回ってみる。

だが、丘は風に揺られて草が波打つだけで、人の姿など何も無い。びろの姿も、人の温もりに憧れる獣たちの姿もなかった。

俺はしばらくの間、呆然と立ちつくすだけしかできなかった。

が、不意に、

「くっ…ははっ、あはははははっ…」

俺の口から笑いが漏れる。

悲しくはない。

自分の馬鹿さ加減に呆れた、自嘲の笑いでもない。

ただ、何となく笑いたくなつた、それだけだった……。

その後、俺は陽が傾き始めようかという頃までずっと、ものみの丘を歩き回っていたが、誰一人として出会うことはなかった。

それでも不思議なことに、絶望とか悲しみはない。

今まで真琴がいなかったのが、これからも続く、ただそれだけのことなのだ、どこか

で自分でも分かっていた。要するに俺はそれを確認しただけなのだ、と。

ここには真琴はいない——それだけ分かれば十分だ。と言うか、そもそも真琴はいつだって一緒にいるじゃないか。秋子さんと一緒に買い物したり、名雪とびろの取り合いをしたり、俺と一緒に出掛けたり……。そうさ、いつも一緒なんだ。

そう思うと、ここにきてみた価値は十分にあるように思える。

俺はくるりと向きを変えて、商店街の方へと向かって歩き出した。いつかの天野と同じように、後ろを……丘の方を振り向くことなく。

きた時よりも速いペースで歩き続けて俺が商店街に入ると、買い物用の鞆を抱えている、見知った人の背中を見つけた。

「秋子さん！」

俺が声をかけると、秋子さんは笑顔で返してくれる。

「祐一さん、もう用事はすんだんですか？」

「あ、いえ、別に用事と言うほどのものではないですよ。それよりも、その荷物俺が持たますよ」

俺がそう言いながら秋子さんの鞆へと手を伸ばすと、秋子さんも分かったような笑みでそれを俺に差し出した。

「そう、それじゃお願いするわね」

そして、俺が鞆を持つ……が、これが意外に重かった。今日の夕飯の材料にしては量も多いようだ。

「……結構重いですけど、何ですか、コレ？」

俺が素直な感想とともに質問をしても、秋子さんはいつもの笑顔だ。

「ええ、ジャムの材料を買ってきたんですよ」

ジャムと聞いて、思わずあの黄色いジャムを連想してしまったが、幸いにも鞆の中身はリンゴのようで、かすかにリンゴの香りがする。…それにしても、やはり量が多いような気がしないでもないが、それはこの際置いておこうと思っていたら、秋子さんがふと俺に向かつて訊ねてきた。

「今日の夕飯、何か食べたいものありますか？」

「え？ これっておかずも買ってあるんじゃないんですか？」

逆に訊き返す俺に、秋子さんは手をそつと顔を当てて答える。

「困ったわね」

ちなみに全然困ったようには見えない。

「何がですか？」

「でも、ジャムに使う分はまた別に買えばいいものね」

話がよく分からないが、秋子さんは一人で困って、一人で納得しているようだ。だが、ただか俺の思惑とは全然違う方向に進んでるような気がする。ことだけは間違いないだろう。

「それじゃ今夜はリンゴ料理にしますね」

ほら…。

こうして今夜のメニューはリンゴ尽くしに決まった…。ちなみに、俺はひとことも「リンゴが食べたい」とは言っていない。

だが、秋子さんの笑顔を前にして、俺が今さらそれを否定することは叶わない。それに

秋子さんの料理はおいしいのだから、それがリングだろうが何だろうがうまいものができるに決まってる。

だから、俺は笑ってうなずくしかない。

そうして、しばらく秋子さんと商店街を歩いていると、思い出したように空を見上げながら、秋子さんが言う。

「こう天気がいいと、本当に気分もよくなるわね」

俺も視線をやや上に向けると、その先には綺麗な夕焼け空があった。

「そうですね」

「祐一さん」

俺を呼ぶ秋子さんの声。俺はまだ視線を上げたままなので、その表情は分からないが、恐らくいつものように優しい笑みを浮かべているだろう。

「はい？」

「いいこと、ありました？」

「い……ええ、あつたと思います」

一瞬だけ「いいえ」と答えそうになったが、やはりあそこに行つてよかったと思直し、俺はそのまま答えた。

「そう、それはよかったわね」

少しだけ嬉しそうな秋子さんの返事。それに合わせるように、俺も少しだけ笑いながら返す。

「ええ」

「これからはもつといいこともありますよ、きつと」

「そうですね、きつと」

そう、ものみの丘にいらなくても、真琴は俺たちといつも一緒だ。だから、これからもつといいことがあるに決まってる、俺がそう思った時だった。

——あうーっ……

空耳かと思った。

幻聴かと思った。

——…クチュンツッ！ 何でこんなに急に冷えるのよう…

秋子さんのイタズラかなと思った。

そうでなくても似たような声なんて…いくらでもいるさ。

——肉まん…欲しかったのに、お金もなかったし…。あうーっ…お腹すいたよお…

肉まんが好きだけど、金がなくて買えないやつなんて、いくらでもいる。

お腹をすかしてる時に、肉まんを選ぶやつだって…いるはずだ…。

——でも、どこに行ククチュンツッ！…たらしいのよおーっ

迷子なんて、そりゃ商店街にはつきものだ。

行き場が分からないやつなんて…よくいるものだ…。

——あうーっ……みいくんな祐一が悪いんだからあ……クチュンツッ！

祐一？

そんな名前のやつは……たぶん、たくんいる……はずじゃないか…。

——何で、真琴がこんな目にあわなきゃいけないのよう……

真琴？

だから、

そんな、

名前の、

やつなんて……

「真琴アイツしかいないじゃないかつ！」

自然に俺の声は大きくなっていった。だが、秋子さんや周りがどう思うかなんて、関係ない。

俺は鞆を持ったまま、ぐるりと声のした方に向きを変え、走り出していた。九割以上の期待と確信も一緒にしながら。

そして、しばらくして目的の姿を発見した。

「うーっ……何でここにいるのかも分からないし……」

商店街のどこどこに設置されているベンチに腰を下ろし、うつむき加減にして、左手で自分のお腹を、右手で猫を遊ばせている。

うにやうにや……と、右手の中で安心しきったような様子を見せている猫は、俺にも見覚えがある。言うまでもなく、びろだ。

だが、びろも、びろと一緒にいるせいも、一向に俺に気づく気配はない。それよりもそいつの言ってることの方が気になる。

何でここにいるのか分からない……そいつは確かにそう言った。

まったく、しょうがないやつだな。

ここに理由なんて、本当に簡単なことなのに、それすらも分かっていないなんてな。まあ、人の姿になるには、記憶を失うってのは変わっていないのかも知れないけど。

だけど、俺には分かっていた。そいつがここに理由も、そいつは二つの大きな代償を払う必要はないってことも。

何故なら、それは……。

…いや、そんなことはもう、どうでもいいんだ。とにかく、俺の目の前にいることだけは確かなんだから。

そう思うと同時に、俺は笑いが込み上げてくるのを止められなかった。

「ははっ…ははははははっ…」

すると、ようやくそいつが俺に気づいたらしく、慌てて顔を上げた。

「えっ？ わっ、だ、誰よお…」

その慌てぶりも変わらない。

「な、何よう…人の顔をジロジロ見るなんて…。もしかッチュンッ！」

強がってるようでないながら、それは弱々しきを感じさせるだけのところも同じままだった。

「相変わらずマコピー語は使ってるようだな、真琴」

「今のは、もしかしてクシヤミが重なっただけよう…って、あれ？ 何で真琴の名前を知ってるの？ あなた、真琴のこと知ってるの？」

本当に知らなかったとしても、そばで聞いていれば、名前ぐらいは分かるだろう。だが、俺の前にいるこいつにはそんな説明をしても無意味だ。

「ああ、知ってるさ」

「どうして？ 真琴は何も……あれっ？」

真琴の言葉が途中で詰まり、何とも不思議そうな表情で、俺の方を見ている。そんなしぐさもどこか懐かしさを感じながら、俺は極めて簡潔にそれに答えた。

「知ってるに決まってるじゃないか」

「あなた……もしかして、祐一？」

きょとんとしながら俺に訊く真琴。どうも、以前の記憶は曖昧になってるらしい。ま、それでも、名前を覚えていたのは大したもんだな。

「俺たちは家族なんだぜ、真琴」

「あうーっ、さっぱり分かんないわよう……」

「だから、何も問題はないんだってば」

「真琴には全然分かんないわツチュンツ！」

「いいんだよ、お前は何も分かんなくても、俺たちはちゃんと分かっているからさ」

俺が極めて簡潔に話してやっているのに、真琴のやつは一向に釈然としない様子のままだ。いらついているように見えるが、それは俺とのやり取りそのものに対するものではなく、自分の記憶の曖昧さに対してのものだろう。それでもこの場合は、真琴の矛先は俺しかない。

「うーっ……何だかムカつく。やっぱり、あなた祐一でしょっ！」

やり場のない怒りを俺に向けるように、真琴が強い口調で言った。それに対して、俺も少しかだけ口調がきつくなってしまう。

「そうだ……って、さっきから言ってるじゃないか」

とその時、それまでの流れを無視したような雰囲気の声が届いた。

「お帰りなさい、真琴」

「え……」

それは秋子さんの声だった。とともに、真琴の前に、あのいつも通りの穏やかな笑みがあつた。

真琴の様子を見ると、俺に対する態度とはうってかわって、急におとなしくなっていた。こいつの曖昧な記憶の中でも、秋子さんの笑顔は残っているのだろう。

俺との態度の違いに、少しだけ釈然としないものがあるが、よく考えてみればいかにも真琴らしい。

「お帰りなさいと言うのは、まだ早いかしらね？」

黙ってしまった真琴に、秋子さんがそつと笑いながらいった。早いと言うのは、まだ家に帰ってないからと言う意味なのだろうが、真琴はそれにも何も答えなかった。だが、秋子さんはそんなことを気にする様子もなく、今度は俺に向かって言った。

「いいこと、あつたわね、祐一さん」

「そうですね」

俺も自分の感じたままに、うなずいてみせる。実際、いいことはあつたのだから。しかし、そんな俺と秋子さんのやり取りの間も、真琴はじつと黙って、俺たちを見つめていた。

「……………」

「真琴、どうしたの？」

秋子さんが優しく訊ねると、真琴は上目づかいにおずおずと口を開く。どちらかと言えば不安そうな表情である。

「あの……お帰りって……真琴に言ったの？」

「もちろんよ」

秋子さんの短く簡単な答え。

「……真琴……行ってもいいの？」

「あなたの家なんだから、遠慮することはないでしょ」

そう答えながら、秋子さんは困ったように手を顔に添えている。

「……この子も一緒に？」

真琴はそっと右手にびろを抱いて、それを見せながら小さな声で訊ねた。

それに対して、俺は思わず「そりゃ家の飼い猫だぞ」と言いそうになったが、さすがに秋子さんの返事はひと味違う。

「もちろん、その子も一緒よ。さ、帰りましょ」

何もかも包み込むような大きな優しさ。そんなものを感じさせるほどの笑顔と優しい口調。そう言えば、天野と話した時だってこんな感じだった。もしかしたら、こう言う話し方に真琴は弱いのかも知れない。秋子さんの言葉ごとに、真琴から徐々に不安が消えていくのが、俺にもよく分かる。

「……帰る？」

「ええ、みんな待ってたのよ、真琴が帰ってくるのを」

「……いいの？」

「今日は真琴が食べたいものを作ってあげるから」

と秋子さんが言った時、真琴の表情がそれまでとは微妙に変化していた。不安そうに俺たちを見ていたのが感じられなくなり、すっと視線を下にずらしてしまったのだ。

「……あの」

そして、真琴は口ごもってしまうのだが、それは不安だとかそんなものではなく、単に恥ずかしがってるだけのように見える。

「何が食べたいの？」

「……………」

なおも優しい言葉を続ける秋子さんに、真琴はうつむいて何も答えない。

「遠慮せずに言えよ、真琴。いくらお前でも、秋子さんの料理がおいしいことくらいは覚えてるだろう？」

俺がそう言うと、真琴は俺の方をちらっと見た後、すぐに視線を落とし、そっとつぶやくように答えた。

「あのっ…真琴……………」

「なあに？」

秋子さんが続きを促すように顔を近づけると、不意に真琴は顔を上げて元気な調子で告げた。

「肉まんが食べたいっ！」

その突然の行動と言葉の内容の両方に、俺は一瞬後じさりしてしまったが、秋子さんにはそんな様子は全然ない。

「ええ」

とこれまたにつこりと真琴に答えている。

…何と云うか、本当にさすが秋子さんだと思う。が、次の言葉を聞いて俺はさらに驚きを隠せない。

「帰ったら早速用意するわね」

「…って、秋子さんが作るんですか？」

肉まんが食べたいと言う真琴のリクエストは分かるが、そんなものはコンビニで買ってくればすむ話じゃないか。そんな風に感じながら、俺が訊き返すと、

「たまにはいいじゃない？ せっかく真琴が食べたいって言うんだし」

と答えるだけで、それを聞いて真琴のやつも急に元気になっている。

「やったあー！ 肉まんっ肉まんだあ！」

そりゃまあ、肉まんってのはれっきとした中華料理の一つだし、それを夕食にするってのは、まるきりおかしな話じゃないのは分かる。

ただ、コンビニとか売ってる肉まんの感覚だと、どうしてもそれを夕食にと言う発想に違和感を感じてしまうのは…、

「それじゃ帰りましょ」

「うんっ！」

…どうやら、俺だけらしい。

いつの間にやらすっかり真琴も秋子さんに懐いているし、秋子さんは秋子さんで本当に嬉しそうだし、ここで俺が文句を差し挟むのは無粋ってもんだ。

「やれやれ：また、騒がしくなりそうだな」

先に歩き出している二人には聞こえないくらいの声でそつとつぶやくと、俺も二人に従って歩き出した。

真琴がどれだけの記憶を持っているのかとか、これまでどうしていたのかなんてことは、俺たちにとっては大したこっちゃない。いなくなつた間のすき間なんて、あつと言間に埋まつていくに決まつてるんだからな。どうしてつて：そりゃ、俺の前を歩く二人の姿を見れば、一目瞭然だ。

夕焼け色に染まる商店街を、仲良く寄り添って楽しそうに話をしながら歩く真琴と秋子さんの姿、それはどこから見ても、親子の姿だった。

ふと、前を歩いている真琴が足を止めて、俺の方に向かって叫ぶ。

「祐一、遅いっ！ 短い足で大変なのは分かるけど、肉まんが待ってるんだから、早くしてよねっ」

俺に向かって怒る真琴の顔を眺めながら、俺は「明日、学校で天野に何て話そうか？」なんてことを考えながら、少し空いた二人との距離を縮めるべく、勢いよく地面を蹴つた。

「お前の方が足は短いだろがっ」

俺の声が聞こえたのか、真琴はぶいっと怒つたようななしぐさをしたが、さすがに秋子さんの手前もあつてか、何も言い返すことはしなかった。

その時。

早足で歩き出した俺は、心地よい風を全身に感じていた。そして、その風にまじつて、どこからか声が聞こえたような気がした。

『クロスフェード』

俺はふと足を止めて、ものみの丘の方を見つめる。もちろん、ここから丘が直接見えるわけではないが、それでも俺は丘の方に向かってそっとつぶやいた。

「ああ、あいつは家族だからな」

そして、二度と丘の方を振り向くことなく、俺は再び二人の方へと足を進めた。

春もそう遠くはない頃の、極めて普通の一日……のことだった。

真琴のいない生活が終わり、真琴のいる生活が始まる。

そう、たったそれだけの、ごく当たり前の一日のことだ。

だって、この日常は一瞬の煌めきなんかじゃなくて、ずっと続くのだから。

『クロスフェード』

『クロスフェード』あとがき

『Kanon』というゲームに対して、様々な意見（感想）があると思いますが、この物語は私なりの真琴の結末に従うものです。ですから、理解できない方もいるでしょう。ただ私は書きたいものを書いた、それだけです。

この物語の続きは、どうなるかは分かりません。ですが、真琴たちの話はまだ終わっていません。…というより、これが始まりなのです。この後、水瀬家には様々な出来事があるでしょう。そうした話をゆっくりと一つ一つ書いていけたらいいな…と、本当に思っています。

ちなみにクロスフェードとは、フェードインとフェードアウトを同時に行って、曲と曲が重なりながら入れ替わるようにする演出効果のことをいいます。

一九九九年六月三十日 記

1999/06/30 初版 ash

1999/07/10 修正 ash

PDF書式変更:2016/05/15